

カリフォルニアデイリーニュース連載

日本から輸入した新肥料

「ミネヒロン(ミニハイ)」の

アメリカ各地における実績レポート

(高倉博士 米國講演旅行同行記)

アメリカ・ミネヒロンセールズカムパニー

副社長 ジョー・エス・大島

(国際医農学会米州大陸責任者)

一、本稿は、加州で著名な米日語版新聞「カリフォルニアデイリーニュース」のすすめにより、執筆投稿したものである。

二、日本のドクタータカラの医農学から生まれた新ミネラル複合肥料「ミネヒロン（ミニハイ）」が、ただ一つの日本からの輸入肥料として米国政府の認可を得、われわれの手で普及が開始され、まだ二年有余にしかならないが、カリフォルニア州全域の多数の進歩的な農民の絶大な支援のもとに、広汎な普及に成功し、その実績報告は枚挙にいとまがない。

又アイダホ・オハイオ・アリゾナなど周辺各州と、遠くはテキサス・ニューメキシコ・ユタ・コロラド・ミネソタ・ミズーリー・アーカンサス・フロリダ各州の普及が開始された。

三、本年度の高倉博士アメリカ講演指導旅行に同行し、各地の実績を親しく見聞したので、その一部を紙上に披露した。

一九六八年五月

ロサンゼルス・カリフォルニア

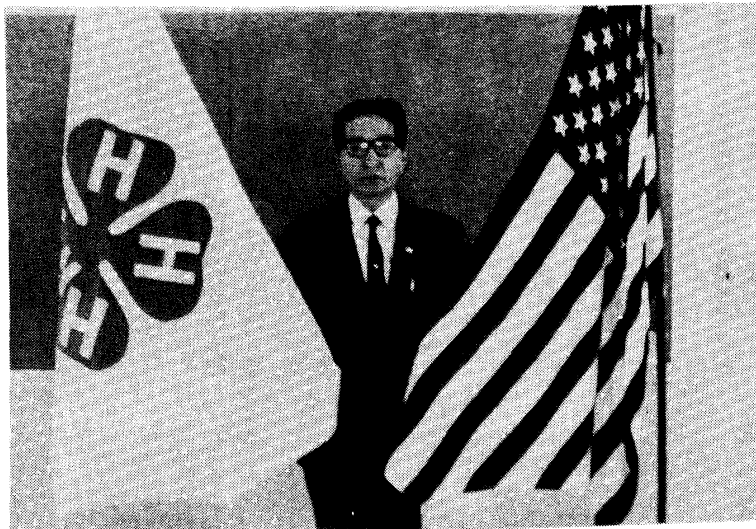
ジョー・エス・大島

一九六八年五月一日号

第一報

肥料ミネヒロン(ミニハイ)の効果

ジョー・エス・大島



カリフォルニア大学アグリカルチュア・イクステン
ジョンサービス(サンタクルーズカウンティ)で講
演したときの高倉博士

一、まえがき

世界最初の医農学提唱者として名高い日本の
医学者兼農学者の高倉博士が、二十年來の研究
によってミネラル複合肥料「ミネヒロン一号
(別称ミニハイ)」を開発し、日本政府登録
肥料として、広く日本各地の驚異的増収に成功
し、三年前より我米国にも輸入許可となり、ま
ず加州農業家の間で、研究試用されていること
は、すでに本紙でいく度も報道されている。

高倉博士は、カルフォルニア大学訪問や、農
業現地指導のため、昨年五月來米されたが、本
年も三月上旬より下旬まで滞米、主として加州
南北を歴訪し、昨年に引き続き研究指導講演を
行ない絶讃を博した。

私は、米国におけるミネヒロン普及販売指導
の責任者の一人として、ジミー品川社長とともに、
終始博士に同行し「医農学」の新理論と歴
大な実績を日夜見聞し、又、実際に加州農民に
よって証明された実績に触れることができた。
その中には今までの農業技術では期待できなか
ったことに成功した農民のよろこびが、数多く

披露されていた。

昨年度の博士の講演旅行の際にも、すでに、
いくつもの驚異的な成功報告は受けたが、昨年
新肥料の使用法が正しく教えられてからの一年
弱の間に挙げた成果は、博士が日本や諸外国
で二十年來得てきた成績と、ほぼひとしいもの
であり、その種別も又、米國農産物の各種目に
及んでいる。

加州農業振興のため、農民意欲の向上のため、
私はその実際の紹介を行なうことを義務で
あると信じてここに発表したい。

二、オレゴン州ポテト増収報告

米州西部二十四州のポテト指導界に著名なH
農園にて特記すべきミネヒロンの成果が報告さ
れた。H農園のミネヒロン試験は、次のように
行なわれた。

六十エーカーのポテト畑で、長さ×ファイ
トのウネを四列ミネヒロン区とし、となりの四
列を対象区とし、四ウネおきに、試験区と対象
区を作り、収穫成績をみた。

成育途上においては、肉眼的には、はっきりし

た差はみられなかった。時折り、試験区と対象区の一株ずつを抜いて比較したが、特別の肉眼的な違いは感じられなかった。

いよいよ収穫の時期となり、両区の収穫を厳密に比較した。その結果は、ミネヒロン区の四列ごとに平均して六十六袋（一袋は百キンの）増収となり、かつミネヒロン区のポテトは、ナンパーワンが圧倒的に多くナンパツ以下が極めて少いことがわかった。

この試験は、博士の指導のごとく、ミネヒロンを土の中に施したもので、必要に応じて葉面散布（シュプレー）を行なったものである。

博士の説は、植物に与える肥料成分の効果は、それが主要成分（N・P・K）であれ、微量成分であれ、第一の条件は土の中から根を通して吸収させることである。

世界の近來の施肥常識、特に微量要素（ミネラル）は葉面から散布するということが指導されてきたが、博士の実験や、信念からいえば、植物の栄養供給の最大の条件は、根から吸わせることであるといふ。

植物が根から栄養を吸収するということは、人間でいえば、すべての栄養は消化器である胃や腸を通して吸収されることと一緒である。

ミネラル程の重要な栄養が、根を通らずに、葉から吸収されればよいと指導さ

れた従来の農学の中で、ミネラルの効果が多分みとめられなかった事は当然である。又特に大切なことは植物の生理に対して、数多くのミネラルが、あるバランスのもとに与えられることである、というのが博士の最も強調するところである。

私は、博士の門下にはいって既に四年、未だ本心に学説を信じきれない立場に置かれたが、こんどのようにアメリカの土でアメリカの農民の手で立証されれば、信じざるを得ないのである。

られなかった点が、今回解消して大きい自信を得たことは嬉しい。

なお、日本ではポテトだけでなく甘藷（さつまいも）、さとう大根（シュガービート）、人参、ごぼう、山芋など根菜類の確実な増収が随所に報告されていることをつけ加えたい。

カリフォルニアデイリーニュース

一九六八年五月四日号

第二報

肥料ミネヒロン（ミニハイ）の効果

ジョー・エス・大島

三、フレスノ・サンノゼ・ロサンゼルス 附近の実施成績から

(A) オレンジ（リードレー）

A 農園においては、オレンジ二十エーカーのうち十エーカーをミネヒロン施用区とした。シュガーの向上や、熟成が早まったことは、他の作物の場合と同じで、他区に比べて十日早く出荷し、ブライスも一箱六ドル五〇セントという高値であった。間もなく霜がきたので残りの二〇%以下のダメージをだしたが、対照

区や他の人々の園では、霜害で総体の六〇%以上のダメージをだしている。

博士が常に強調する「健康な作物をつくり熟期を早め得るのがミネヒロンの特長の一つである」という説がアメリカのオレンジ園で証明され、かつ、危険な霜害のタイミングをたくみに回避できたという点に注目すべきである。

(B) グレーブ（フアラー）

B 農園では、二〇エーカーのグレーブ園のうち、毎年豊作する五エーカーには

ミネヒロンを使わず、不作畑十五エーカーにミネヒロン土中葉面両施用を行なってそのクラップを比較した。ミネヒロンを使わなかった毎年豊作畑では天候不良にわざわざいされ、五〇%のダメージをだしたが、ミネヒロンを使った不良畑のグレーブは、甘味も形状も秀れた物が増収、天候不良に左右されることなく、ほとんど一〇〇%の出荷を行なっている。

(C) グレーブ貯蔵の成功（フアラー）

C 集荷倉庫においては、従来のグレーブ

ブ貯蔵中に、一カ月たてば、変質腐敗のため二千箱もダメージをだしている程であるが、ミネヒロン施用区グループでは、ダメージが少なく、九〇%以上の出荷が可能であった。これらの事実は博士のいう「ミネヒロンの持つ独特のミネラルバランスによって、栄養が理想的になった植物の細胞は、一つ一つが強固になり、保存期間が長くなる」という説が如実に立証されたものである。

(D) キューカンボー貯蔵の成功(フアラール) (きゅうり)

K農園は全耕地に一昨年度より、ミネヒロンを土中施用し、葉面散布を実施しているところで、すでに第一年度日より、イチゴ、トメトの増収と品質向上と保存期間延長などが報告されている。昨年度はミネヒロン二年地中連用畑において、各種蔬菜の優秀作物が得られたが、その中、キューカンボーの保存を実験した。一般区の物とともに水室に入れ、連日その両区の保存力をみた。一般区は最長八日目に変質し、中味が白く変わり食用に耐えなかったが、ミネヒロン区はその後数回の観察において常態を保ち続け、実に五十四日も保存に耐えたのである。ミネヒロン区のキューカンボーは、中味がチミツで、シャリが良く固く、美味であった。

保存力の実験では同氏はすでに、一昨年度からイチゴその他で経験済みであったが、今回のキューカンボーで改めて

ミネヒロン効果に一驚、増々自信を深めたと喜んでいた。なお、同地方のキューカンボーの出荷のアベレージはエーカー当り、四〇〇箱であるが、K氏は、一、二〇〇箱を出荷した。このように保存力の延長と、圧倒的な増収を兼備することこそ万人の願う安定農業ではなからうか。

(E) トメトの増収(サンガー)

同地方のトメトは昨年の天候不良に加

えて根ぐされ病多発のため、ほとんど全滅に瀕し、ある人は時き直しをした者もあるが、それは収穫のおくれてプライスが合わないで損が多かった。

N農園では、初期より二エーカーのトメト畑全面にミネヒロン土中施用を行ない葉面散布を行なったところ天候不良を完全に克服して優秀な成績が上がり、実にナンパーワンが多く、ナンパーツー以下が少なかった。二エーカーのトメト

で、一万六千ドルを得た。一箱で最高値八ドル五〇セントを示したことで品質は想像されるであろう。

博士の二十年のミネヒロン実験の中で、不良地において確実に収量をあげることに天候気象の不良の中で立派に成育を続けることが各国農民に大きな自信と信頼をもたせていることは周知の事実である。

カリフォルニアデイリーニュース

一九六八年五月七日号

第三報

肥料ミネヒロン(ミニハイ)の効果

ジヨール・エス・大島

(F) イタリアマスカット(プレスノ)

F農園に於いては、二エーカーのイタリア・マスカットにミネヒロン土中葉散面を施した。従来通り、間引き(シーニング)のためにジベラルを使っている。

その結果はミネヒロンジベラル施用区では、ジベラルによる落果(間引き)が起

こらないので、やむなく手で間引きをせねばならなくなり、この点では不満を訴えられた。然しクラップを見ると甘味が向上し皮が丈夫で、腐れが少なく収穫の百%近くの出荷が出来た。前年度は五〇%のダメージを出したのに比較して、その質の向上に驚いていると語った。

(G) チェリートメト(アロイオグラン

デ)

O農園は前年度よりミネヒロン土中施用と葉散を行なっている。ミネヒロンのチェリートメトは形も大きさも組合規格で最良のものが出来、腐れが非常に少ないのが特長として目立った。

普通十一月半ばに霜の来る前に青い実をとり、土間に保管し、赤く色づくると出

荷するのである。普通は出荷までに青い物が五〇％はダメージとなるが、ミネヒロン使用では九〇％以上の出荷が出来た。又、赤色のつき方も全体が一様に光沢ある赤色を呈し、商品としてルックスが甚だ良かったと報告している。

ポテトの項でも触れたが収穫のナンパワワンが圧倒的に多くとれて、ナンパワツ以下が少ないと云う事は、ミネヒロンの今までの実験であらゆる作物に共通して現れる特徴の一つである。ミネヒロンが土中に施用され、更に葉

散が併用される時の収穫が品質の向上と共に粒が揃うという耕作者には最良の条件が得られるのは、過去二十年の研究実用の中でこの国でも確実に認めていると、博士は語っている。

カリフォルニアデイレニューズ

一九六八年五月十一日号

第四報

肥料ミネヒロン(ミニハイ)の効果

ジョー・エス・大島

四、アルカリ土壌とミネヒロン

土壌のPHと、農作物の収量との関係は極めて重大である。酸性(アシッド)になり過ぎたり、アルカリ(アルカリイ)になり過ぎたりした耕地が増々ふえつつある。この悪条件を、総合ミネラルで調整して克服する研究に打ち込んだのが高倉博士である。どちらに傾いた土でも、人間のために完全な作物は作れない。医学的に作物の欠点を補おうとする念願が二十年に亘る植物実験となり、解決策の一つとして生れたのが、ミネヒロ

ンである。

博士のとりに組む土の問題は、日本や台湾では酸性土であり、米国においてはアルカリ土である。

アルカリ土においては、すでに知られている如く、土の中に含まれる自然の鉱物質の中から作物に必要な微量元素が少しづつとけ出す事が押えられたり、効き目がなくなったりするものである。我々が植物育成のため重要であることを知っているところの、マンガン、鉄、銅、亜鉛などは、アルカリ土の中ではとけ難い

ので、作物体には欠乏症状が出易いのである。

加州各地の、特にアルカリの強い地帯では従来も微量元素は沢山研究され、散布されて来たが、効果が確定的でなかった。

ミネヒロンの場合も一般的用法ではその効果が顕著ではないものもあった。

今回博士の来米を待ってこのアルカリ地帯作物の強健化と、ミネヒロン施用技法の研究と検討が連日続けられた。

結論としては、水溶、く溶両成分が巧

なバランスの下に組立てられた土壌肥料ミネヒロンの土中施用を必ず行ない、根部の強化育成と同時に、葉面散布の頻回施用が、植物の全生理促進に重大な貢献をする事がわかった。現にこの方式のとられていた人々の圃地では、満足すべき収穫成績が挙げられていた。

ワッソンの勉強会に於いても、苺やその他のそ業で、品質がグッと向上した報告を受けた。

なお、今回のべて来た各種作物の育てられた土地はおおむね、加州特有のアルカリ土であった事を推察して頂きたい。特に高度であるのがワッソンの苺や、オレンジカウンターのような海岸地帯であった。その中でミネヒロン区の苺のシュガーの向上(品質向上)がインスベクターより証明された例や、白人農園の苺が、ミネヒロン使用初年度に、従来考えられなかったような大粒で、甘味の強いものが得られたと云う発表は、博士の学理とその指導方針と農民の実証と云う、三つの合致の上に打ち立てられた成功である事を謙虚に喜んでゐる次第である。

この他にも博士来米以前に於いて、我々の手許に報告されたミネヒロンの成績は山積しているので、それは他日お知らせする機会にゆづり、今回の実績報告は博士に同行して加州各地の実験農民から得た生の報告だけである。

五、高倉博士から得た新しい知見の紹介

(A) ネマトーダ(線虫)とミネヒロン
土壌が疲弊して、土中含有の有機無機成分のアンバランスが起こると、ネマト

ーダが増殖する。
日本における長い間のミネヒロン土中施用の結果、ネマトーダがだんだん姿を

消すと云う事実は博士の研究業績の中に特筆するもの一つである。
(中断・第五項につづく)

カリフォルニアデイリーニューズ

一九六八年五月十八日号

第五報

肥料ミネヒロン(ミニハイ)の効果

ジョー・エス・大島

る。

ミネヒロンのような総合微量元素と主要素の混合体は、土の中の微生物をおびただしく増殖させる特性があり、各種微生物の増殖の中で「糸状菌」も増えてくる。土中に糸状菌が、沢山あればネマトーダは糸状菌にシメ殺されるので、次第に少なくなるものである。このことは、

高倉博士のミネヒロンの土中微生物増殖論の実際は、このブラマー教授発見事実を、すでに十余年前から人為的に成功していた事である。我々は改めて博士の卓見と実証に敬意を捧げた。

余りにも奇想天外のようで、学者も農民も、初めは仲々信じ難いようであるが、それならば、一九六五年五月号のリーダーズダイジェストをひもとけばよい。

加州を始めアメリカ全土農業の癌の一つであるネマトーダの問題解決のため、我々は新たな意慾を燃やしはじめた事を皆さんに知らせたい。

ラトガース大学のブラマー教授が、土中で糸状菌がネマトーダをシメ殺す実際の現象を顕微鏡下で発見した事が誌上で世界に発表されている。他国の発表ではなく、アメリカ合衆国の雑誌記事であ

なお博士のこの実験は、日本全土各所で立証され、すでに、日本九州某県の農業指導機関において、ガバメントテストとしての立証も行なわれた事も付け加えたい。

(B) CO_2 が根から吸収されて光合成を促進

させること。

この事実はすでに学界で知られているが、一般農民の知識の中にはなく CO_2 は昔ながらの学説通り、葉からだけ吸われるものとされている。博士等の研究陣はすでに十七、八年前よりこの事実に基づいた肥料の与え方や、肥料の持つ化学変化の中に、この目的を織り込んでいたものである。

土中 CO_2 の発生は、従来はむしろ有害と考えられていたが、この現象を巧に植物に捕えさせる事が光合成促進の鍵である事を博士は常に強調されている。

但しこの土中 CO_2 の存在と、これをとり入れる作物体の方にも数々の良い条件が備わらねばならない。無限に大量の CO_2 が

土中にあれば反って害をなすものである。 CO_2 根部吸収の条件の一つとして、同時に各種ミネラルが土中に有ること、又各種ミネラルが植物体内で複雑なカタライザー(触媒)の役目をなすこと、根から吸収する CO_2 とバランスのとれたミネラルが共存すること等がその条件であるという。

博士に接した加州農民は日白人を問わずこの深淵な理論と實際を感銘して受けとったのである。

科学の大衆化を念願とし、まず農民が科学者にならねばならぬと絶叫する博士は滞米中、その知識と技術を惜しみなく農民に伝えてくれた。高倉博士は理念と研究成果の普及と人類愛の立ち場から、国際医農学会を組織し、アメリカと台湾の指導と国際交流に努力している風変わりな科学者であり、学会の米州大陸の重責を私に委ねられた。

私は博士の理念が、我が国に必ず大きな貢献をもたらす事を信じて疑わない。いや、すでに加州各所の農民の福祉が得られているのである。

私共は、今この事業が単なる物質の輸入や販売とは考えたくない。もっと大きな意義を国際的に持つものだという誇りに満ちた仕事だと思っている。

開発者高倉博士の理想も全くそこに根底を置くものである。

(おわり)

文責者

ジョー・エス・大島

北米・カルフォルニア州ロサンゼルス市

国際医学農学会本部

日本・茨城県水戸市河和田町一八七六

電話水戸(51)二四二四番

MADAM GR
★ Spiritual and Card
Phone. 937-87
5150 W. Olympic Blv

MADAM RAY
Reading
4319

福今レ